

# 第6章 リミタリアニズムの限界

著者: ロバート・フーセビー (Robert Huseby)

## 1. はじめに

リミタリアニズムとは、分配的正義に関する見解であり、人々が道徳的に許容される範囲で所有できる財(たとえば、金銭、資源、福祉、ケイパビリティなど)の上限値ないし閾値が存在するという立場である<sup>1</sup>。この見解は興味深いが、やや困惑させるものもある。なぜなら、分配的正義に関する大半の理論は、人々が何を持つべきか(what people ought to have)を強調しているのであって、何を持つべきでないか(what they ought not to have)を強調しているわけではないからである<sup>2</sup>。

本論文において、私は道具的(instrumental)バージョンと本質的(intrinsic)バージョンの双方においてリミタリアニズムを評価する<sup>3</sup>。まず、イングリッド・ロベインズ(Ingrid Robeyns)による道具的リミタリアニズムを検討する。これは現在文献上最も精緻で詳細なバージョンである。しかし、この理論は多くの点でもっともらしいものの、それ自体としてはリミタリアン的ではないことが明らかになる。一定の非理想的条件下で適用される場合にはリミタリアン的な含意を持つ可能性があるが、真正の道具的リミタリアニズムには至らない。むしろ、この見解は道具的平等主義(instrumental egalitarianism)と十分主義(sufficientarianism)の組み合わせとして理解するのが最善である<sup>4</sup>。

さらに、より一般的に、私は本質的リミタリアニズムの説得力あるバージョンを想定することが困難であると論じる<sup>5</sup>。ロベインズは、徳(virtue)、パターナリズム、完全主義(perfectionism)に基づくいくつかの可能性を示唆している(ただし明示的には支持していない)。しかし、これらのいずれも有望ではない。主な理由は、それらが本質的リミタリアニズムには至らないことである。むしろ、これらは(当然のことながら)それぞれ徳、パターナリズム、完全主義の本質的価値に基づいているように思われる。リミタリアン的特徴を持つ価値、たとえばいくつかの徳が存在するかもしれないが、それは分配的正義の議論においては限定的な価値しか持たない可能性が高い。また、私は「持ちすぎることの悪さ」(the badness of having too much)により直接的に基づく別の可能性も検討する。このバージョンも説得力がないことが判明する。

次に、私は道具的リミタリアンの見解に戻り、ダニエル・ズワルトウッド(Danielle Zwarthoed)による個人的自律の価値に基づく道具的リミタリアニズムの提案を検討する。この説明もまた、ロベインズのものと同様に、私の見解では非リミタリアン的原理(十分主義)に照らして理解するのが最善である<sup>6</sup>。したがって、道具的リミタリアニズムを擁護する今日までの主要な試みは、リミタリアニズムとして機能していないように思われる。さらに、あらゆる形態の道具的リミタリアニズムは、何らかのより根本的な本質的価値に依拠しなければならない。私は、もっともらしい形態の本質的リミタリアニズムが存在する可能性について深刻な疑念を提起しているため(上記参照)、この本質的価値は何か別のもの、たとえば平等主義、十分主義、自律でなければならない。これらの主張が正しければ、リミタリアニズムを分配的正義の独自で独立した原理として必要とするかどうかは明らかではない。

さらに、私は、リミタリアニズムがより限定的な原理として、すなわち分配的正義のより一般的な(本質的または道具的)原理としてではなく、ある種の認識論的条件下で依拠される「推定(presumption)」として価値を持つ可能性があるという提案を評価する。また、リミタリアニズムが競合する原理よりもインパクトのある原理として価値を持つ可能性があるという考えも簡潔に検討する。これらのリミタリアン的バージョンのいずれも、特に有用である可能性は低いと私は論じる。

したがって、私の全体的な結論は、リミタリアニズムは分配的正義の議論において非常に限定的な価値しか持たないということである。とはいえ、すべての可能な形態の(道具的および本質的)リミタリアニズムをここで評価できるわけではなく、私が検討するものよりももっともらしい、あるいはより

独立した他のバージョンが存在する可能性があることを強調しておくべきである<sup>7</sup>。それでもなお、この結論はリミタリアニズムにとって良い兆しではない。

---

## 2. 口ペインズの道具的リミタリアニズム

リミタリアニズムは一般的に、「人生において十全に繁栄する(fully flourish)ために必要とされる以上の資源を持つことは道徳的に許容されない」という主張によって特徴づけられる<sup>8</sup>。十全な繁栄は詳細には特定されていないが、特定の中心的な側面において少なくとも十分なケイパビリティを持つことを指す。このレベルを超えて、余剰の金銭、富、またはその他の金融資源を持つことは道徳的に許容されない<sup>9</sup>。口ペインズは、「所得と富の分布の上位層に焦点を当てた正義に関する現代的理論化がほとんど(あるいは全く)ない」ことを「驚くべきこと」と述べている<sup>10</sup>。リミタリアニズムは、最富裕層に関する規範的研究のこの欠如に対する応答である。

口ペインズの特定のバージョンのリミタリアニズムは非理想的である。それは、「強く理想化された特性を持つ世界」において正義が何を要求するかという問い合わせを構成するものではない<sup>11</sup>。それはまた道具的である。なぜなら、リミタリアニズムは本質的に価値があると見なされているのではなく、むしろ我々の非理想的世界において「二つの本質的価値:政治的平等…そして未充足の緊急のニーズを満たすこと」を実現するために必要であるとされるからである<sup>12</sup>。したがって、口ペインズによるリミタリアニズムの擁護は、これら二つの本質的価値の実現が我々の非理想的世界においてリミタリアン的原理と政策を必要とするという、二つの明確な論証から成る<sup>13</sup>。以下では、これら二つの論証を順に評価する。

### A. 政治的平等からの論証

第一の論証によれば、リミタリアニズムは政治的平等を確保するために必要である。なぜなら、「所得と富の大きな不平等は、民主的過程を脅かす」からである<sup>14</sup>。政治的不平等は、いくつかの仕方で生じる可能性がある。所得と富の不平等は、民主的過程への「不平等なアクセス」につながる可能性がある。たとえば、「政治家は資金提供を必要とし、富裕な市民や企業がこの役割を引き受けることができる」<sup>15</sup>。また、「富裕層は他の市民よりも多くのロビィング能力を持ち」<sup>16</sup>、政治的意見決定に対してより大きな影響力を行使する可能性がある。

この論証全体は、トマス・クリスティアーノ(Thomas Christiano)の研究に大きく依拠している。クリスティアーノによれば、「富と所得の不平等は、利益団体による政治的連合の形成と、議題設定と連合形成を通じた政治的意見決定を促進することによって、民主的平等を損なう」とされる<sup>17</sup>。この論証がもっともらしいものであることは否定できない。しかし、私の見解では、この論証は実際にはリミタリアン的ではない。問題は余剰資源それ自体ではなく、不平等であるように思われる。口ペインズ自身も、「比較的平等な社会において…[超富裕層]への容認できる対立物は、彼ら自身が超富裕になることではなく、彼らが非超富裕のままであることである」と述べている<sup>18</sup>。

もしすべての人が超富裕であったとしても、そのことがそれ自体で民主的過程や政治的平等に脅威を与えるとは思われない。ある程度の政治的不平等は依然として残る可能性があるが、それは人々が政治に関心を持つ程度や、政治的関与を通じて繁栄する程度が異なるためである。しかし、全員が同程度に超富裕であるために誰も政治的影響力が過度に大きくなる、ということは起こらないだろう。これはもっともらしいとは思えない<sup>19</sup>。したがって、問題の根源は不平等でなければならない。

したがって、政治的平等への関心がリミタリアン的政策に対する道具的理由を提供する理由は明確ではない。もちろん、リミタリアン的政策は実際の非理想的で不平等な我々の世界において平等を増大させ、それが今度は政治的平等を増大させる可能性が高い。しかし、十分主義的政策や優先主義的政策についても同じことが言えるだろう。そして、多くの状況下では、功利主義的政策についても同様

である。したがって、政治的平等という目標は、特にリミタリアン的政策の根拠を提供するものではなく、道具的リミタリアニズムは政治的平等のために必要ではない。

道具的リミタリアニズムは政治的平等のために十分でもない。なぜなら、ロベインズのリミタリアニズムは閾値以下の富の差異を容認するからである<sup>20</sup>。誰も余剰金銭を持たず、閾値にいる人々(十全な繁栄にいる人々)が富裕層や超富裕層であった場合よりもはるかに少ない政治的影響力を持っていても、彼らは最も緊急のニーズがかろうじて満たされているだけの人々よりも多くの政治的影響力を、少なくとも潜在的には持っている。

確かに、最もよく知られた分配的原理のいずれも、道具的解釈において、政治的平等を確保するために必要かつ十分であるとは限らない。(十全な繁栄のレベルでの)完全な経済的平等でさえ、ある程度の政治的不平等と両立可能かもしれない。それは単に、人々が政治的影響力を異なる程度に優先し、ある人々は政治的活動を通じて繁栄する一方、他の人々はそうでないからである<sup>21</sup>。したがって、リミタリアニズムが(おそらく)他のすべての原理と同様に、政治的平等を確保するために必要でも十分でもないと指摘することは、効果的な批判ではない。

しかし、私が論じてきたように(そしてロベインズが時折示唆するように)、問題の核心は、分配領域における経済的手段の不平等(余剰金銭それ自体ではなく)が政治領域において道徳的に不快な不平等を引き起こすことがあるように思われる<sup>22</sup>。もしそうであれば、問題は実際には個人間の経済的手段の保有における不一致によって引き起こされている。これを踏まえると、最も合理的な戦略は不一致そのものに対処することである。そのためには、上位層から始めるか、下位層から始めるか、あるいは両方から同時に始めることができる。ロベインズは上位層から始めることを選択しているが、なぜ下位層から始めるべきでない(優先主義者や十分主義者が示唆するように)のか、あるいは、最ももつとももらしいことだが、なぜ両端から同時に始めるべきでないのかについて論証を提示していない<sup>23</sup>。私の見解では、道具的平等主義(金銭または金融資源の)が、手元の問題を考えると明らかに最ももつとももらしい原理である。

例を挙げて説明しよう。十全な繁栄の限界が10にあり、Aが5を持ち、Bが15を持っているとしよう<sup>24</sup>。リミタリアニズムは限界を超える保有に反対し、分配はA:5とB:10であるべきだと示唆する。これは、リミタリアニズムが閾値以下のさらなる分配と両立しないと、不当に示唆するものではない。要点は、理論が分配の特定の一端、すなわちこの場合はBの5単位の余剰を指す「上位層」を強調しているということである。これらの単位がなくなれば、リミタリアニズムはもはや含意を持たない(理論の十分主義的側面をどの程度強調するかによるが)。

(道具的)十分主義についても同様のことが言える。閾値が10にあり、5単位の未所有の利用可能な単位があるとしよう。これらの単位はAに与えることができ、AはT10を得て、Bは15のままである。十分主義それ自体はこれ以上の含意を持たない(ただし、この見解も、十分性が確保された後のさらなる分配と両立する)。したがって、十分主義は下位層から始まり、リミタリアニズムは上位層から始まる。しかし、リミタリアニズムは閾値以下の不平等を許容し、十分主義は閾値以上の不平等を許容する。

他方、平等主義は、AとBの両方が10を持つことになるように、BからAへの5単位の再分配を率直に示唆する。繰り返すが、もしもつとももらしいように不平等が問題の根源であるならば、リミタリアニズム(あるいはその点では十分主義)を解決策として提示することは的を外している。これは、リミタリアニズム(および十分主義)が確かに問題を軽減するとしても同様である。その理由は、利用可能な代替案、つまり平等主義が存在し、それが優れており、少なくとも非常に広範な状況下において、問題をより大きな程度まで軽減するからである<sup>25</sup>。

政治的平等からの論証には、より一般的な問題もある。世界は、すべての人が十全に繁栄できるだけの十分な資源がある状態にあるか、すべての人が十全に繁栄できるだけの十分な資源がない状態にあるかのいずれかであると仮定できる<sup>26</sup>。最初の可能性を考えてみよう(リミタリアン主義者は理想的

なシナリオとしてこれを拒否するかもしれない)。すべての人が十全な繁栄の閾値に達した後に何らかの余剰の富が残っている場合、リミタリアニズムはそれを平等に分配することができ、その場合見解はリミタリアン的というよりも平等主義的になり、政治的平等からの論証は冗長になる。あるいは、余剰の富の破壊を要求することができるが、その場合見解は浪費的でもっともらしくなる。

他方、世界にすべての人を十全に繁栄させるのに十分な資源がない場合(これは非理想的前提とより一致している可能性がある)、ロベインズの繁栄説明から、十全な繁栄の発生率または程度のいずれかを最大化するために、何らかの十分主義的な方法ですべての余剰の富を費やすべきであることが導かれるように思われる<sup>27</sup>。政治的平等は、このシナリオにおいて重要な役割を果たさないだろう。

したがって、すべての人を繁栄させるのに十分な資源がある場合、リミタリアニズムはもっともらしくないほど浪費的であるか、平等主義と区別がつかない。すべての人を繁栄させるのに十分な資源がない場合、リミタリアニズムは十分主義と区別がつかないように思われる。したがって、政治的平等からの論証は、リミタリアニズムを独立した原理として正当化することができない。

## B. 未充足の緊急ニーズからの論証

ロベインズの二つ目の論証によれば、リミタリアニズムは未充足の緊急ニーズに取り組むために必要である。「政治的平等とは異なり、緊急ニーズ論証は現在の正義理論で十分に発展させられてきた問題に関係している」<sup>28</sup>。とはいっても、この論証は二つの点でより特殊である。第一に、十分主義者(およびおそらく優先主義者も)は、この問題にリミタリアンよりも直接的に取り組んでいる。第二に、緊急ニーズ論証はリミタリアニズムを規範的な配慮事項として導き出さない。むしろ、主張は次のようなものである:誰かが余剰の富を持つのは、他の人々が「ニーズにひどく欠乏している(in dire need)」場合にのみ許容されない<sup>29</sup>。言い換えると、関連する事実は、一部の人々が(いかなる理由であれ)十全に繁栄しておらず、最も緊急のニーズさえ満たされていないということである。

したがって、緊急ニーズ論証も、独立した規範的原理としてリミタリアニズムを正当化することができない。それはむしろ、平等主義、十分主義、あるいは他の原理に対する道具体的支持を提供する。

実際、ロベインズ自身の記述は、次のように示唆している:

極度の貧困がもはや存在せず、貧しい人々のすべての緊急ニーズが満たされれば、誰も持ちすぎることができないということを私が主張していると考えるべきではない。この推論は、貧困の程度がなくなれば、富の集中の悪影響は自動的に消失するという、誤った前提に基づいているだろう<sup>30</sup>。

これは、緊急ニーズ論証が独立しているということを示唆しているように見えるかもしれない。しかし、続く文は次のように述べている:

しかし、非常に不平等な社会では、富の集中がもたらす悪影響—たとえば、政治的平等の侵害—が依然として残る<sup>31</sup>。

これは、平等主義的(あるいは他の代替的)原理が依然として関連性を持つことを示している。ロベインズがここで念頭に置いている例は、すべての緊急ニーズが満たされ、貧困が根絶されているが、依然として大きな不平等が存在し、政治的不平等をもたらしている社会である。このシナリオでは、リミタリアニズムは政治的平等のために道具体的に正当化される可能性がある。しかし、すでに論じたように、政治的平等のためには、平等主義(あるいは他の原理)の方がリミタリアニズムよりも優れている。

私の結論は、したがって、ロベインズの道具体的リミタリアニズムは、リミタリアニズムそれ自体ではなく、道具体的平等主義と十分主義の組み合わせとして最もよく理解されるということである。この結論は、驚くべきものではない。なぜなら、リミタリアニズムは、それ自体として、すなわち独立した規範的原理としては、あまり意味をなさないからである。人々が持ちすぎてはならない、あるいは持

ちすぎることが悪いというのは奇妙な主張である。これを支持する唯一の方法は、道具的または本質的理由を提供することである。ロベインズが行ったのは前者であり、そして彼女が提供した道具的理由は実際には平等主義と十分主義を指し示している。

---

### 3. 本質的リミタリアニズム

私の知る限り、本質的リミタリアニズムは文献で擁護されていない。しかし、そのような見解が擁護可能かどうか、あるいは少なくとももつともらしい形で提示できるかどうかを検討することは興味深い。ロベインズ自身も、「このリミタリアニズムのバージョンの根底にある直感は...過度に豊かであること、ないし人生において十全に繁栄するために必要以上の金銭を持つことが、それ自体として悪いということである」と示唆している<sup>32</sup>。しかし、彼女はこの可能性を展開したり擁護したりしていない。むしろ、彼女は徳、パターナリズム、完全主義に基づく関連する議論への言及を通じて、それがどのようなものであるかを示している。以下では、これらの提案と、持ちすぎることの悪さに基づくより直接的な提案を評価する。

#### A. 徳に基づく本質的リミタリアニズム

余剰の富を持つことは、それ自体として悪い可能性がある。なぜなら、それは悪徳だからである。ロベインズは、次のような「悪徳」がありうると示唆している:「精神の狭さ、傲慢さ、傲慢、気取り、強欲、虚栄心、貪欲、利己主義」<sup>33</sup>。私はこれらが徳の候補であることを疑わないが、次の二つの理由から、これは本質的リミタリアニズムには至らないと考える。

第一に、十全な繁栄のレベルを超える富を持つことがこれらの徳を阻害する唯一の方法であるかどうかは、全く明確ではない。精神の狭さ、気取り、強欲などは、かなり貧しい人々においても実証される可能性がある。したがって、もし徳が本質的に善であり、その欠如(悪徳)が本質的に悪いのであれば、関連する閾値は十全な繁栄のレベルよりも低いレベルにあるべきである(ある程度の悪徳が容認可能であると示唆される場合を除いて—しかしこれは奇妙である)。他方、もし富(特に余剰の富)が独特の仕方で徳の発達を阻害するのであれば、徳に基づく議論は道具的リミタリアニズムを支持することになる。そして、道具的リミタリアニズムはすでに、それが擁護されると主張されている他の価値(政治的平等と緊急ニーズの充足)への訴求を通じて評価されている。

第二に、徳倫理の伝統では、通常、何が徳を構成し、何が悪徳を構成するかを決定するために外的基準への訴求がなされる。たとえば、アリストテレスの伝統では、人間の本質ないし機能(function)が関連する。エウダイモニアは、人間の本質を実現することにある。もしそうであれば、これらの徳は本質的に善なのではなく、エウダイモニアにつながるという意味で道具的に善なのである。あるいは、徳は人間の本質の実現の一部を構成するという意味で構成的に善である可能性もある<sup>34</sup>。いずれにせよ、徳がそれ自体において本質的に善であり、その欠如がそれ自体において本質的に悪であるというのは、徳理論の主流の解釈ではないように思われる。

したがって、徳に基づく議論は、少なくとも徳の主流の説明の下では、本質的リミタリアニズムには至らない。それは、エウダイモニア(あるいは類似の基準)の観点からの道具的または構成的リミタリアニズムの可能性を示唆するかもしれない。そのような立場は探求に値するかもしれないが、それはロベインズが示唆する本質的バージョンとは異なる。

#### B. パターナリズムに基づく本質的リミタリアニズム

パターナリズム的根拠に基づくりミタリアニズムのバージョンは、余剰の富を持つことが本人自身にとって悪いことを前提とする可能性がある。彼らは「自分自身を害している」<sup>35</sup>。このバージョンも、道具的パターナリズムの変種として展開できることは明らかである。余剰の富は、たとえば精神の狭さ、気取り、強欲などの徳の欠如につながる可能性がある。また、それは社会関係を損ない、し

たがって福利を低下させる可能性もある。両方の可能性が正しい可能性もある。しかし、これらの場合、パターナリズムに基づくりミタリアニズムは道目的であろう。

他方、もし余剰の富が「それ自体として」悪いのであればつまり、それが他の何かを促進する、または他の何かから成るからではなく一本質的リミタリアニズムが生じる可能性がある。しかし、余剰の富(または余剰の何らかの善)が、それ自体として、つまり他の何らかの善または悪との関係なしに、本人にとってどのように悪いのかを理解することは困難である。パターナリズムに基づく本質的リミタリアニズムは、したがって、それが何であるか、そしてなぜもっともらしいのかを明確にする必要がある。

### C. 完全主義に基づく本質的リミタリアニズム

完全主義者は、良い生活ないし人間の繁栄に関する特定の見解を擁護し、この見解を個人と社会の両方に対する道徳的および政治的な要求の基礎として用いる。ロベインズは、余剰の富を持つことは「良い人間の生活を構成するものについての理想」と両立しないと示唆する<sup>36</sup>。したがって、完全主義者は、余剰の富を持つことを制限したいと考えるかもしれない。それは良い生活と両立しないからである。

しかし、少なくとも二つの問題がある。第一に、完全主義に基づくりミタリアニズムは、余剰の富を持つことがそれ自体として悪いと主張しているのではなく、むしろ良い生活を構成するものについての特定の理想と両立しないと主張している。言い換えれば、この立場は、良い生活を送ることが本質的に善であり(または少なくとも良い生活を送らないことが本質的に悪であり)、そして余剰の富を持つことがこの本質的善と対立すると主張している。したがって、これは本質的リミタリアニズムではなく、むしろ本質的完全主義である。

第二に、完全主義に基づくりミタリアニズムの基礎となる「良い生活」の説明は、かなり具体的である必要がある。より正確には、それは余剰の富を持つことと対立するものであり、それを下回る富を持つことと対立するものではないような説明でなければならない。そのような説明が存在するかもしれないが、ロベインズは提供していない。たとえば、それは古代ギリシャの自己充足性の理想に基づく説明かもしれない<sup>37</sup>。しかし、そのような立場は、文化や文脈に依存した完全主義的理義によって動機づけられており、本質的リミタリアニズムとは異なる。

### D. 持ちすぎることの悪さに基づく本質的リミタリアニズム

より直接的な可能性は、「持ちすぎること」(having too much)がそれ自体として悪いということである。ロベインズが提案するように、「過度に豊かであること、ないし人生において十全に繁栄するために必要以上の金銭を持つことが、それ自体として悪い」<sup>38</sup>。

この立場は、一見すると本質的リミタリアニズムの最も有望なバージョンのように思える。しかし、それでもいくつかの問題がある。まず、それは「持ちすぎる」ことの意味を特定する必要がある。ロベインズは、十全な繁栄のレベルを超える富を持つことと定義している。しかし、なぜこのレベルが関連するのか? もし余剰の富がそれ自体として悪いのであれば、十全な繁栄は無関係であるように思われる。あるいは、もし十全な繁栄が関連するのであれば、余剰の富はそれ自体として悪いのではなく、十全な繁栄を超えることに関連して悪いのである。

さらに、「持ちすぎること」は通常、比較的概念である。つまり、他の人々と比較して多すぎるということである。しかし、それは本質的リミタリアニズムの基礎とはなりえない。なぜなら、それは不平等(したがって平等主義)を前提とするからである。あるいは、「持ちすぎること」は、それ自体として過剰であることを意味する可能性がある。しかし、その場合、なぜそれが悪いのかを説明する必要がある。そして、その説明は、余剰の富がそれ自体として悪いのではなく、他の何らかの善または悪との関係で悪いことを示す可能性が高い。

私の結論は、したがって、本質的リミタリアニズムのもっともらしいバージョンを構築することは非常に困難であるということである。これまで検討したすべての提案は、徳、パターナリズム、完全主義、あるいは他の何らかの本質的価値に依拠している。余剰の富がそれ自体として悪いという主張は、単独では支持されていない。

---

## 4. より一般的な道具体的リミタリアニズム

前述のように、ダニエル・ズワルトウッドは個人的自律の価値に基づく道具体的リミタリアニズムを提案している<sup>39</sup>。彼女の議論は、余剰の富が自律を損なうという主張に基づいている。具体的には、「個人の資源と富が、彼らが自律的エージェントとして機能するために必要な量を超えて増加すると、彼らの自律を損なう」<sup>40</sup>。

ズワルトウッドの議論には三つの主要なステップがある：

1. **自律の閾値:** 自律的に生きるためにには、ある最小レベルの資源が必要である。彼女はこれを「自律閾値(autonomy threshold)」と呼ぶ<sup>41</sup>。
2. **自律の損失:** 自律閾値を大幅に超える富を持つと、実際に自律が損なわれる可能性がある。これは、たとえば他者への依存、社会的孤立、または過度の選択肢による麻痺を通じて起こりうる<sup>42</sup>。
3. **リミタリアン的含意:** したがって、自律を保護し促進するために、富の上限を設定すべきである。

この議論は興味深く、いくつかの重要な洞察を提供している。しかし、私の見解では、これもロベインズの議論と同様の問題を抱えている。

第一に、自律閾値を大幅に超える富が自律を損なうという経験的主張は、さらなる支持を必要とする。確かに、非常に裕福な人々の中には、特定の仕方で自律を失う人もいるかもしれない。しかし、これが一般的なパターンであるか、あるいは富それ自体によって引き起こされるかどうかは明確ではない。

第二に、そしてより重要なことに、もし問題が自律の損失であるならば、解決策は必ずしも富の上限を設定することではない。むしろ、自律を促進し保護する他の方法があるかもしれない。たとえば、教育、社会的サポート、または制度的改革を通じてである。

第三に、ズワルトウッドの議論は、実際には二つの閾値を含んでいる：自律閾値(下限)と、それを超えると自律が損なわれ始める上限である。彼女の立場は、したがって、二つの十分主義的原理の組み合せとして理解できる：十分な自律を確保するための下限と、過度の自律の損失を防ぐための上限である。

私の結論は、ズワルトウッドの自律に基づく道具体的リミタリアニズムも、ロベインズの議論と同様に、リミタリアニズムそれ自体というよりも、十分主義(または類似の原理)の変種として最もよく理解されるということである。

---

## 5. リミタリアニズムの限定的形態

これまで、リミタリアニズムを分配的正義の一般的原理として評価してきた。しかし、リミタリアニズムがより限定的な役割を果たす可能性もある。ここでは二つの可能性を検討する：推定としてのリミタリアニズムと、よりインパクトのある原理としてのリミタリアニズムである。

## A. 推定としてのリミタリアニズム

ディック・ティマー(Dick Timmer)は、リミタリアニズムを「推定(presumption)」として理解することを提案している<sup>43</sup>。この見解によれば、リミタリアニズムは一般的な正義の原理ではなく、特定の認識論的条件下で依拠されるべき推定である。具体的には、我々が富の分配について完全な情報を持っていない状況において、リミタリアニズムは有用な指針を提供する可能性がある。

この提案には一定の魅力がある。確かに、実践的意意思決定においては、完全な情報なしに行動しなければならないことが多い。そのような状況では、経験則や推定が有用である。しかし、この提案にはいくつかの問題がある。

第一に、なぜリミタリアニズムが他の推定よりも優れているのかが明確ではない。たとえば、平等主義的推定や十分主義的推定も、同様に有用である可能性がある。実際、不完全情報下での意思決定理論は、平等主義的アプローチ(たとえば、マクシミン原理)を支持する傾向がある。

第二に、推定としてのリミタリアニズムは、リミタリアニズムを独立した規範的原理として擁護するものではない。それは単に、特定の実践的文脈において有用であるかもしれない経験則を提案しているにすぎない。

第三に、リミタリアニズムが推定として有用であるためには、それが正しい方向を示している必要がある。しかし、これまでの分析が正しければ、リミタリアニズムは必ずしも正しい方向を示していない。むしろ、平等主義や十分主義の方が、我々が達成しようとしている価値(政治的平等、ニーズの充足、自律)により直接的に対処している。

## B. よりインパクトのある原理としてのリミタリアニズム

もう一つの可能性は、リミタリアニズムが理論的に独立していなくても、より「インパクトがある(impactful)」または「動員力のある(mobilizing)」原理として価値を持つ可能性があるということである<sup>44</sup>。この見解によれば、リミタリアニズムは公共の議論において、富裕層への課税や富の再分配を支持する強力なレトリックを提供する可能性がある。

この主張には何らかのメリットがあるかもしれない。確かに、「誰も持ちすぎるべきではない」というメッセージは、理解しやすく、訴求力があるかもしれない。しかし、このインパクトに基づく議論にもいくつかの問題がある。

第一に、インパクトは真理や正当性の代替物ではない。もしリミタリアニズムが理論的に健全でないならば、それが公共の議論において有用であるという事実は、それを受け入れる十分な理由にはならない。

第二に、リミタリアニズムが本当にインパクトがあるかどうかは明確ではない。平等主義や十分主義も、同様に強力なメッセージを提供する可能性がある。たとえば、「すべての人が十分に持つべきである」または「不平等を削減すべきである」というメッセージも、公共の議論において訴求力を持つ可能性がある。

第三に、誤解を招くメッセージを使用することには道徳的問題がある。もしリミタリアニズムが実際には平等主義や十分主義の別名であるならば、それをリミタリアニズムと呼ぶことは混乱を招き、非生産的である可能性がある。

## 6. 結論

本論文において、私はリミタリアニズムのさまざまな形態を評価してきた。私の主要な結論は次のとおりである：

- 1. 道具的リミタリアニズム:** ロベインズの道具的リミタリアニズムは、リミタリアニズムそれ自体というよりも、道具的平等主義と十分主義の組み合わせとして最もよく理解される。政治的平等と緊急ニーズの充足を達成するためには、リミタリアニズムは必要でも十分でもない。これらの目標は、平等主義や十分主義によってより直接的に達成される。
- 2. 本質的リミタリアニズム:** 本質的リミタリアニズムのもっともらしいバージョンを構築することは非常に困難である。徳、パトーナリズム、完全主義、または「持ちすぎることの悪さ」に基づく提案は、いずれも本質的リミタリアニズムには至らない。それらは、他の本質的価値(徳、良い生活、平等など)に依拠している。
- 3. 自律に基づく道具的リミタリアニズム:** ズワルトウッドの自律に基づく道具的リミタリアニズムも、十分主義の変種として最もよく理解される。それは、自律を確保し保護するための下限と上限を提案するが、これはリミタリアニズムというよりも二重の十分主義である。
- 4. 限定的形態のリミタリアニズム:** 推定としてのリミタリアニズムや、よりインパクトのある原理としてのリミタリアニズムも、分配的正義の原理としてのリミタリアニズムを擁護するものではない。これらの提案は、リミタリアニズムの実践的有用性や修辞的力を強調するが、その理論的健全性や独立性を確立するものではない。

これらの結論は、リミタリアニズムが分配的正義の議論において非常に限定的な価値しか持たないことを示唆している。もちろん、本論文で評価されていない他の形態のリミタリアニズムが存在する可能性があり、それらがより説得力があったり、より独立していたりする可能性はある。また、ロベインズが後に提案している「問題駆動型」アプローチ<sup>45</sup>の下では、リミタリアニズムが理論的に独立していくなくても、実践的価値を持つ可能性がある。

しかし、少なくとも本論文で検討した形態において、リミタリアニズムは独立した規範的原理としては成功していない。むしろ、リミタリアンが達成しようとしている価値は、平等主義、十分主義、または他の既存の原理によってより直接的かつ効果的に達成される。したがって、分配的正義の理論において、リミタリアニズムを独自の原理として必要とする理由は明確ではない。

とはいっても、この結論は、富裕層への課税、富の再分配、または所得と富の不平等の削減が不当であるということを意味するものではない。むしろ、これらの政策は、リミタリアニズムではなく、平等主義、十分主義、または他の確立された正義の原理によって正当化される可能性が高いということである。

最後に、本論文の分析は、リミタリアニズムに関する議論が分配的正義のより広範な理論的景観において重要な役割を果たしていることを示唆している。リミタリアニズムの評価を通じて、我々は平等主義と十分主義の関係、道具的正義と本質的正義の区別、そして分配的正義における上限と下限の役割について、より深い理解を得ることができる。この意味において、リミタリアニズムについての議論は、それが独立した原理として成功するかどうかにかかわらず、分配的正義の理論に貴重な貢献をしている。

---

## 参考文献

Casal, Paula. 2007. Why Sufficiency is Not Enough. *Ethics*, 117, 296–326.  
<https://doi.org/10.1086/510692>

Christiano, Thomas. 2012. Money and Politics. In: David Estlund (ed.), *The Oxford Handbook of Political Philosophy* (Oxford: Oxford University Press), 241–57.

- Gheaus, Anca. 2018. Hikers in Flip-Flops: Luck Egalitarianism, Democratic Equality and the Distribuenda of Justice. *Journal of Applied Philosophy*, 35, 54–69.  
<https://doi.org/10.1111/japp.12198>
- Hursthouse, Rosalind. 1999. *On Virtue Ethics* (Oxford: Oxford University Press).
- Kramm, Matthias and Ingrid Robeyns. 2020. Limits to Wealth in the History of Western Philosophy. In Ingrid Robeyns (ed.), *Having Too Much* (Cambridge: Open Book Publishers), 61–90.  
<https://doi.org/10.11647/OPB.0338.03>
- O'Neill, Martin. 2008. What Should Egalitarians Believe? *Philosophy and Public Affairs*, 36, 119–56. <https://doi.org/10.1111/j.1088-4963.2008.00130.x>
- Robeyns, Ingrid. 2017. Wellbeing, Freedom and Social Justice: The Capability Approach Re-Examined (Cambridge: Open Book Publishers). <https://doi.org/10.11647/OPB.0130>
- . 2019. What, if Anything, is Wrong with Extreme Wealth? *Journal of Human Development and Capabilities*, 20, 251–66. <https://doi.org/10.1080/19452829.2019.1633734>
- . 2022. Why Limitarianism? *Journal of Political Philosophy*, 30, 1–24.  
<https://doi.org/10.1111/jopp.12275>
- Temkin, Larry. 2003. Egalitarianism Defended. *Ethics*, 113, 764–82.  
<https://doi.org/10.1086/373955>
- Timmer, Dick. 2021. Limitarianism: Pattern, Principle, or Presumption? *Journal of Applied Philosophy*, 38, 760–73. <https://doi.org/10.1111/japp.12502>
- Volacu, Alexandr and Adelin Costin Dumitru. 2019. Assessing Non-Intrinsic Limitarianism. *Philosophia*, 47, 249–64. <https://doi.org/10.1007/s11406-018-9966-9>
- Zwarthoed, Danielle. 2019. Autonomy-Based Reasons for Limitarianism. *Ethical Theory and Moral Practice*, 21, 1181–204. <https://doi.org/10.1007/s10677-018-9958-7>

---

## 翻訳注記

- 原文: Robert Huseby, "The Limits of Limitarianism," in *Having Too Much*, ed. Ingrid Robeyns (Cambridge: Open Book Publishers, 2023), 151–173.
  - 翻訳: Claude (Anthropic)
  - 翻訳日: 2025年11月20日
1. Robeyns 2017, 2019. なお、本論文は Robeyns (2017, 2019) で提示されたリミタリアニズムを評価対象とする。Robeyns (2022) ではリミタリアニズムが詳述され、修正されているが、本論文では十分に考慮できない(ただし、そうした修正には適宣言及する)。 ↪
  2. とはいえる、Kramm and Robeyns (2020) は、プラトン、アリストテレス、トマス・アクィナス、ジョン・メイナード・ケインズ、カール・マルクス、ジョン・ロック、ジョン・スチュアート・ミルに「原リミタリアン的(proto-limitarian)」議論の痕跡を見出している。 ↪

3. ある事柄が本質的に善(intrinsically good)であるとは、それがそれ自体において善である場合(他の善を促進することによっても善であるか否かにかかわらず)を指し、道具体的に善(instrumentally good)であるとは、他の善を促進することによって善である場合を指すと仮定する(O'Neill 2008; Robeyns 2017, 5; Temkin 2003, 768 参照)。なお、リミタリアニズムは他の仕方でも価値を持ちうる。たとえば構成的価値(constitutive value)を持つ可能性がある。しかし紙幅の都合上、そうした可能性については本論文では扱わない。 ↪
4. ただし、反対の見解については Robeyns (2022) を参照。 ↪
5. 私の知る限り、本質的リミタリアニズムは文献上で擁護されていない。しかし、リミタリアニズムは比較的馴染みのない分配的正義の原理であるため、もっともらしい本質的バージョンがあるかを検討することは興味深い。 ↪
6. Zwarthoed 2019. ↪
7. Robeyns (2022) は、政治理論の「理論駆動型(theory-driven)」と「問題駆動型(problem-driven)」を区別している。問題駆動型の政治理論は現実世界の実際の問題を解決することを目指すのに対し、理論駆動型の政治理論はより専ら道徳的知識の獲得を目指す(これは問題駆動型理論が道徳的知識に関心がないということではない)。彼女はさらに、リミタリアニズムが理論的に独自であるか否かにかかわらず、問題駆動的観点から価値を持つ可能性があると論じている。残念ながら、本論文ではこの可能性を検討する余裕がない。 ↪
8. Robeyns 2017, 1. ↪
9. Ibid., p. 4. したがって、(ケイパビリティに基づく)繁栄が正義の測定基準であり、資源(富と金銭を含む)が分配対象である。Gheaus 2018 参照。 ↪
10. Robeyns 2017, 2. 他方、民衆的イニシアティブ(オキュパイ運動を含む)や、複数の経済学者(ピケティ 2014 を含む)は、分布の最上位に異議を唱えてきた: Robeyns 2017, 3. ↪
11. Robeyns 2017, 2. ↪
12. Ibid., 4. ↪
13. ロベインズは後に、リミタリアニズムが「経済的不平等が非常に大きい世界、あるいは緊急のニーズが未充足である世界、またはその両方」においてのみ防御可能であると述べている: Robeyns 2019, 18. ↪
14. Ibid., 5. ↪
15. Ibid. ↪
16. Ibid. ↪
17. Ibid., 9-10. ↪
18. 不平等は他の箇所でも言及されている(ibid., p. 6)。 ↪
19. これは、余剰金銭が平等に分配されている場合でも、民主的問題を決して引き起こさないと主張するものではない。おそらく買収投票が増加する可能性があり、買収投票は民主的価値と対立する。しかし、政治的平等そのものが特に脅かされることはないだろう。 ↪
20. これは見解の必然的特徴ではないが、閾値以下の差異が許容されないとすれば、リミタリアニズムは少なくとも平等主義と同程度にリミタリアン的になる。なぜなら、その場合、十全な繁栄のレベルでの平等を命じることになるからである。 ↪

21. Volacu and Dumitru 2019, 257. ↵
22. もちろん、政治的不平等の他の源泉も存在しうる。 ↵
23. 未充足の緊急ニーズからの論証(下記参照)は、分布の下位層によって動機づけられていることに注意。しかし、政治的平等からの論証は独立に妥当なものとして提示されている。上記で引用したように、「リミタリアニズムの民主的論証は、クリスティアーノが概説するメカニズムから容易に導出できる」: Robeyns 2017, p. 6(強調追加)。また、政治的平等からの論証は緊急ニーズ論証への言及なしに提示されており、それに依存していないように思われる(逆もまた然り)。 ↵
24. この例は、測定基準と分配対象を区別していない。私は単に、AとBが富を繁栄に変換する効率が等しく、両者とも10で最大限に繁栄し、5では最大限未満に繁栄し、15では最大限を超えて繁栄すると仮定している。 ↵
25. 異なる原理の道具的価値に関するいかなる議論も、ある程度は推測的である。リミタリアン的(または十分主義的)政策が、政治的平等という観点から、他のいかなる原理よりも良い結果をもたらす、何らかの特異な状況が存在する可能性がある。しかし、ロベインズの論証の抽象性と一般性のレベルを考えると、平等はリミタリアニズムよりも明らかに優れているように思われる。 ↵
26. ロベインズは、十全な繁栄の閾値は「単なる理想的概念」ではなく、「たとえば今日のフランスで約200万ユーロの富」に相当すると述べている: Robeyns 2019, 17. 世界にはこのレベルですべての人々を繁栄させるのに十分な富があるかどうかは明確ではないが、ロベインズの非理想的前提と一致しているように思われる。 ↵
27. もっともらしいことだが、資源をできるだけ多くの人々を繁栄させることに費やすべきか、資源を一部の人々の繁栄の程度を最大化することに費やすべきかのトレードオフが存在する可能性がある。これについては、Casal 2007 を参照。ロベインズはこの問題に明示的に対処していない。 ↵
28. Robeyns 2017, 9. ↵
29. Robeyns 2017, 10. ↵
30. Ibid. ↵
31. Ibid. ↵
32. Ibid., 5. ロベインズ (2022) を参照。そこでは、完全主義に基づく本質的リミタリアニズムの可能性がより詳細に検討されている。 ↵
33. Robeyns 2017, 14. なお、ここで「悪徳(vice)」は明らかに「vice」の誤植である。 ↵
34. Hursthouse 1999, chap. 9. ↵
35. Robeyns 2017, 15. ↵
36. Ibid. ↵
37. このアイデアについては、Kramm and Robeyns 2020 を参照。 ↵
38. Robeyns 2017, 5. ↵
39. Zwarthoed 2019. ↵
40. Ibid., 1182. ↵

41. Ibid., 1185. ↪

42. Ibid., 1191-1195. ↪

43. Timmer 2021. ↪

44. Robeyns 2022. ↪

45. Robeyns 2022. ↪